木曽義仲から真田幸村への系譜　「日本一の兵」二人が拠点した東信濃・上田地域

大坂夏の陣で徳川方の本陣に迫り、家康を自刃寸前まで追いつめたという真田幸村。その戦ぶりは「日本一の兵」と評され、後世に語り継がれている。そんな幸村から約四百年さかのぼった平安時代末期に木曽義仲は活躍。平家を衰退させ、武士の頂点・征夷大将軍へと駆け上がった。鎌倉方の源範頼・義経軍との戦では、五万ともいう大軍に一千ほどの兵力で立ち向かい、義仲・今井兼平主従二騎になるまで奮戦。散り際まで鎌倉軍を苦しめた義仲もまた、「日本一の兵」といえるだろう。両者には、いくつかの共通点がある。一つには、上小地方を拠点にしたこと。幸村は、真田地域の小豪族から戦国大名まで駆け上がったという真田一族なので、木曽から移ったという義仲とは拠点化の経緯は異なるが、この地から歩み出し、全国に武勇の名を轟かせた点は同じである。もう一つ、少ない兵力で数倍、十数倍もの大軍を打ち破っている点も共通する。

不利な戦いにおいても知略の限りを尽くして、立ちはだかる強敵を打ち負かす縦横無尽な軍略を揮ったことが、両者の真骨頂ともいえるのだ。いうまでもなく、その共通点は、この地にまず木曽義仲という勇将が存在し、「寡兵よく大敵を破る」の史実を残したからこそ生じた。まさしく歴史は繰り返したのである。また、真田一族に血縁があるという海野氏は、木曽義仲の重臣。治承・寿永の乱を生き抜いた海野小太郎幸氏が、鎌倉御家人として頼朝に重用され、東信濃から上州西北部までの広大な範囲を支配したことが、最終的に真田氏の繁栄につながっている。幸氏が頼朝に認められたのは、義仲の長男・義高に忠誠を尽くしたことなどが評価されたからだといわれるので、義仲・義高なくして海野一族の隆盛は、あり得なかったことになるだろう。義仲と真田氏、そして幸村は、海野氏と深く結びついていたことに、大きな共通点を見出せるのである。

真田忍者へと連なる義仲軍の忍術

物語『真田十勇士』が記す真田氏の優れた忍術使いは、とても有名だが、モチーフと見られる忍者・出浦対馬守や横谷左近・庄八郎、割田下総、唐沢玄蕃などの活躍は事実のようだ。

これら優能な真田忍者が輩出されたことにも、木曽義仲は無縁でない。日本の忍術は、大陸渡来人らが中国の孫子兵法を伝え、その「用問篇」を詳細に体系化した技という。諜報や奇襲など、戦いに不可欠な技術だ。

争乱が忍術発展に関わることをうかがわせる逸話は古代からある。聖徳太子は「志能便」という情報収集役を活用し、天武天皇も忍者を使ったという。源平争乱期の忍術では、平清盛が組織した京中治安維持の情報機関「かむろ」が一例。また源義経は、鞍馬山修業時代に鬼一法眼という修験者から忍術を授かり、部下の伊勢義盛が「義経流」を編んだと伝わる。もちろん、木曽義仲にも忍術使いに関わる伝承がある。研究者に有名なのは、「戸隠流」創始者という家臣・仁科大助を駆使した伝説だ。

また家臣で滋野一族の望月氏は、甲賀流忍術の大家になったと伝承され、祢津氏も、戦国時代には「くノ一」を組織化していたといわれる。忍術に深く関わる修験道を見ると、義仲は御嶽行者とつながっているし、依田城周辺には渡来人が多数居住した痕跡がある。真田忍者へと連なる信濃忍術の原型は、義仲勢力やその戦いの中に、すでに表れているのだ。

上田の歴史・文化と義仲・幸村

「信州の鎌倉」と呼ばれる塩田平の文化にも義仲の存在は深く関わった。鎌倉幕府執権北条氏が一族を塩田城に配したのは、依田城に残った義仲勢力の監視のためと見られており、安楽寺や常楽寺、前山寺、中禅寺などにある鎌倉様式仏閣の建立要因になった。上田市街地の上田城跡や旧北国街道柳町、あるいは真田地域の古寺などは、真田氏が活躍した戦国期以降の史跡。義仲と直接的には関わらないものの、今ある上田の名所の多くが、義仲から幸村へ連なる地域の歴史を物語っている。

義仲と東信濃・丸子の武士

東信濃の武将の多くは、保元・平治の乱では鎌倉の源義朝に従っていた。それ以前から、源氏与党が多い土だったとされるので、最初は義仲の父・義賢に属したと見られる。父が討たれた時、斎藤実嫌が幼い義仲の庇護をまず依頼したのは佐久地方の武将とも伝わる。その説によれば、後に木曽へ移ったというので義仲と東信濃の縁は浅くない。元々の地縁・血縁が途絶えていなかったことも、挙兵後に東信濃へ進出した要因かも知れない。

丸子地域。依田城への入城には、同族といわれる長瀬重綱が大役を果たしたと推測される。重綱の職「判官代は、地域紛争の調停などが役割。そんな事情から、依田城主・二郎実信や依田川右岸の有力者・丸子小中太、白鳥庄の海野行親、新治牧を勢力下に置く祢津貞行らの意見を仲立ちし、地域総意で義仲を迎えたのではなかろうか』東信濃の最有力者・海野氏らとともに、丸子の武士は義仲軍の中核をなした。後に鎌倉幕府が勢力監視のために塩田城を築いたと見られていることからも、義仲への忠誠のほどがうかがわれる。

木曽義仲(源義仲)は、平安時代末期の武将。清和源氏のうち河内源氏の流れを汲む。「旭将軍(朝日将軍)」と呼ばれた。幼名は駒王丸。父は源義賢。源頼朝・範頼・義経は従兄弟にあたる。

以仁王の令旨を受け信濃で挙兵し、丸子地域御嶽堂の依田城を拠点に、横田河原で平家方二万の軍を、兵力三千で破った。北陸道を進撃し倶利伽羅峠の戦いでは、平維盛軍十万を撃破。上洛した義仲は、長年の飢謹と平家の専横で荒廃した都の繁栄復活を期待されたが、食糧事情は好転せず、治安回復も滞った。皇位継承問題に絡んで後白河法皇から疎まれ、法住寺合戦に至って法皇らを幽閉。征夷大将軍となったが、その十日後に頼朝が送った源範頼・義経の大軍と激戦の末破れ、近江粟津の露と消えた。

義仲は武蔵大蔵館付近(埼玉県嵐山町) の生まれといわれ、当地の鎌形八幡宮には産湯を汲んだとする清水が残る。西上野の多胡庄(群馬県吉井町) の誕生説もある。

「眉目形はきよげにて美男なりけれども、堅固の田舎人にて、あさましく頑なにおかしかりけり」「色白う眉目は好い男にて有りけれども・・・」(『源平盛衰記』『平家物語』)と、容姿端麗だった。

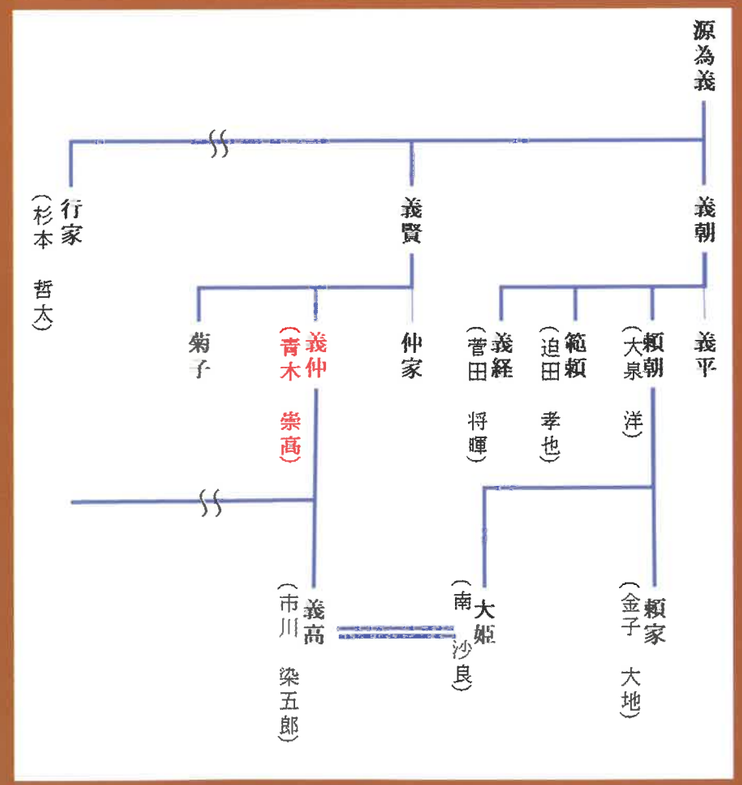
軍勢では、今井兼平や樋口兼光、根井行親、楯親忠ら四天王を筆頭に、信濃全域の武士が一丸主力として活躍。強力な騎馬軍団の編成には、依田実信や長瀬判官、丸子小中太、海野幸親、望月重綱ら、丸子をはじめとする東信地方の武士が大きく貢献した。軍師の大夫坊覚明も海野氏という。

長野県歌「信濃の国」では、義仲を県の偉人の一人と詠う。

治承四年(1180)九月、以仁王の令旨を受け平家打倒に挙兵した際、拠点にした依田城は、上洛戦略の要衝だった。信濃全域と、かつて亡父の勢力下にあった西上野まで、騎馬で二日以内という好立地で、兵力を整えるのに最適だったからだ。受け入れた依田氏や丸子氏、同族の長瀬氏らにも支えられ、有力な上州武士も傘下に収めた義仲は、治承五年六月、越後から攻め寄せた平家勢力を破り、京を目指した。

挙兵した二十八歳の総大将・義仲。従った武将らも、多くは理想の実現に燃える同世代の若者だった。新たな社会を築こうと、純粋な夢を抱いて平家打倒に突き進んだ。

義仲を支えた三人の女性、巴と山吹、葵は、女武者でもあったという。葵は、北陸路の戦いに散った。巴は、粟津の戦いで主従が最後の数騎になるまで従う。山吹は、病で京に残ったが、義仲のもとへ駆けつける途中、鎌倉軍に討たれたという。



※カッコ内はＮＨＫ大河ドラマ『鎌倉殿の１３人』配役、敬称略

木曽義仲肖像
徳音寺所蔵

義仲家紋　笹竜胆（ささりんどう）

木曽義仲合戦図屏風
横田河原合戦
長野県立歴史館所蔵